

NOTE BOOK

Specially Prepared in Tokyo



年 人組

No.

氏名

港區立 高陵中學校

INDEX

PAGE

CONTENTS

木内 昭子	久志本 靖子
佐久間 都	平賀久由
牧 正 勇	羽場智久
加藤紀雄	神谷治彦
岩崎計	岩崎峰
佐々木 明	福西弘太郎
地頭所 憲	宮川嘉勝

二の集のはじめに

木枕のあとはホカホカと暖かい春日和。

僕はいつも随分以前から読んだ。源氏物語の「春期」を教室の図書室の中から取り出してきて、机の上にのせて机の片すみで読みながら、また。時々いやもうすこし前からうなえていた僕の計画を実行した。
(夏と繋がるその)

す
ための準備と云ふ。貢を繰るそり
拂い湯の年換か、改めし儀つら一松。拂
ぐるぐる湯モテモテアキラカの

何がじんじんとするかの底から、成動だ。
《母と子とのゆき徳》され乍年氏——それが私ども單なるやうの想ふられで死ぬまゝへでした。——

一
少
年
志

お帰と生徒との繋り、連絡にてお詫び申さうとしたが、既に二月三日で、
佛生・生きる人の命の四安丸ナリ日付を記す。併し、僅はそれ以前かほソ、
からて産れちるさうと信じるわざ。

十一月十日(土)

你も士門を開いては、つゞ最近のうちに思ひ立つて

心うつろは半ばくらうとしたる

明後日は試験かばりあそんで、

問題ばかりの頭の中の用意がされざると

まか印刷するので、至らしく

一番の問題は起られど

二番はどうだう?

おまかしてきて了事は、なんでも

意図めぐらし、ヒリヒリしながら知れども、

考えたところを二三語詰めこた言葉を、つぎつぎに口をつけて
出でる。試験浪千備——何とさわやかな境地かう。身
自らの能力がありつけども、尽くしき——走ればどうが、あるう
とも、走れば走るの快感を私は、毎度、ちつとも思ひ立た
へんぢやない、たまらず身を走らしむれ——

へへへへへへへへ

帰らぬがために教室よ、試験勉強をすう人のが、
元氣じき張りもえ。

十一月十一日(月)

眼の覚めた餘は朝の陽が東方の階から室の部屋の中を
過ぎる。細い窗の光の線は窓から何がどうん煙で
ある。こうして静かに一枚を、じつと保て待てし日麗れは二つの功德である。
私は二つしたひとは、きあつて少々斗の間もあくすみ入つてくる。
じうときさわれば、どうぞと、思ひ立たれては、暖かく人の
感覚を満たしてから、先の木のゆり薫るやうにあいかれ
少々斗の間もあくすみ入られうれしつれど、それでしもち、
私は少々斗の間もあくすみ入られぬ感覚を思ひ通えず
だ。

(この記録)

×

さやかに武田を私は何が、うなづか怖んれ、お氣持で、お一員
一員とめぐつてから、おさふべきはずをつり、僅くとつま一向に笑しく
はてておる。緊張を氣持、改めらへ顔はやかんで見えなか
れど。せし音を抱ておとす。
少しくはるか、さやかにはるかやさきゆはそれおれ、直劍の事
え、生きるは次めにまたうだ。
おこはおのじうさんれかといふ、少々はお
つて。

傳とうこと書こうと思ひやめかれて。せん書キラヘルシに書
き入る。僕も手帳を抜きこんで、なん泣くよ、と書くとみだ。
おのと黒か、どちらの通りのヘタクソモの事だ。
何時まで續くか、うちつけれど、因くはあらんはあらんの灯と
灯し続かせたり、心の底をう新うた。

二月五日(日)

やがく書き続けて未お日记か、僕のめで一度一周か。フラン
ス出来てしまつたことを僕はえず悲しまずにうれなうとせん歎かず
にはうれなう。机の上を整理してから見覚えあるノート一
枚や、と僕はいふかた。あれこれない二のノート、木をねぐらづけ
うれこりきり二のノート。

誰もこうをいえ、最後の兵の人が僕の机の上に立まって置きて行か
るが、いざま黒龜と一路いきづけられていなかつた。

といふわけでせつぶの集め大きな風穴があつしまつたのです。
埋まるごとに大きくなり風穴――冬の風が颶々この穴を
吹きすぎて行く、火のあらぬ隙あらぬ。それは呻き似た。
ひそかにため自心。

大分もすかしいトヨモリヤシ漢字を使つてやがります。解らな
れば辞書を引きなまえ。

今、うちますぎ、ラジオはカニ放送、カビューレーの豆、詩を読
れてゐる。ちよお好きの木内さん、或は耳もとによつてかじ名前をい
いつだつか、いふて手絆あんまりやうか――ヒュンヒュの厚く深い歌
声、魂の沈黙、行くのを覚えたあわしく胸、奮起。底つき
あらす青空を満ちて沈む行く魂、魂の顔え。
日本人の生活の中、生活ヒツク人、歌を待ちて、歌を語るや

「それからどうぞ」とかわがりますが。
さくをえこ見なれえ。

巻一

だんだん書かくといつては慣れてしまつたうひすのび、今度は一つ
の計画を持ちこみたと田心ります。この年はお学校の文庫ばかり
させしまゝや灰色を形式から離れて身のなじ集められません。
僕たちが目に見、心に感じた
（わゆる）
事からとどき、向秋の歌

山川山かわの喜

からまつりからまつのかせ

（いそぎ）
二ん三三氣味の土き出せば、のびす。
されば、のびす。
真実なんの表情であればある程、青や赤の毫
色は自然に見えるでしよう。匂はかぐわしく香りを放つでしよう。
読む人は、その美しい色と香りに陶酔してしまふでしよう。そして明白への
の生活の力を覚えるでしよう。書かれたんのつか、直接読む人の心
を説あかって行くでしよう。

今度まことにゲンへおまさんへ、おまさんへと、形を繋げ
みたと思ひます。おまさん、おまさんへの卒業も感心や気持ち改め
て考え方、さつまつめたりと田心ります。（親と子）の説く今じと
言えるでしよう。

こう書りおまさんへ、おまさんへと、有島の武郎の余書き者へと、一節

如田んじあされできます。
今んのめり重の許す限ノ書かじめあしう。

2月12日(日)

お前たちが大きくなつて、一人前の人間の肩上つた時、一時の遊び
お前たちのパパは生きているから、さればわからなうことなかつた——父の
書き残したものと絵本“アゲ”を見れる機会がある了うと想ひう。その時
この小さな書き物がお前たちの眼の前に現わるだろ。時々人
じん移つて行く。お前たちの父する木も、お前たちとう見るか、
それは相心像を出来ない事だ。しばらく私たまううて過ぎ去るか、
する時代をわらう憐れむかしれど、お前たちの木の生臭いの味
を笑う憐れむかしれど、私はお前たちの為にうあうん
とをねえ、こり。お前たちがおもて慮る木を踏み出はへて、高へ
遙り折れ木を集め立派えて進まなければ間違つてはだ。もしも
かくお前たちをじんぶん深く歓喜する者かニのせりうるか、或はいた
かとう事実は永久にお前たちに必要立つたと私は思つた。お前
たちが二の書き物を読んで、私の胸の相ひの未熟で兎国そのものをやら
う間れ、木たちの愛はお前たちを暖め、またの万まし人生の
可能性をおおむちの心に味覚させずんおかきりと私は思つた。
だからこの書き物を私はお前たちにあへ書く。

みんなのお母さんもお母さんも、どうでもいいからしゃべる事
です。よくわかり切って「お母さんのお母さん、お母さんですか、お母
さんですか」とか「お母さんですか」とかうびす。この一貫を保て、まああ
思ひ切ってお母さんとお母さんだと因るします。

女子の方に書くといつていうが、おまかせておたら何を
うながしてやるほうと思ひます。無む事じにひきとこね。

「お父さん、お母さんへかぶつたうのびりあさくし。
「お父さん、お母さん」への手紙である。日本語用紙にて書
かれています。いつわりのまゝ気持ちを運びながら書かれてい